

たまびコンペティションに寄せて

野上絹代

【ココトエンパシー】

はじめは、野外の寒さと遠慮とで遠巻きに見ていたが、途中から演者と関わりを持つようになる気になった自身の変化に気づく。雰囲気としてはとても好みだった。が、夜の大学の中庭という、野外にしては閉鎖的な情報が少ない、しかし散漫な空間だったので物足りなさは感じた。

ムーボンが、自身の真実を知ったときのハッとした表情がたまらなく良い。そもそもの着ぐるみの表情が良いということと、人物に「物語」がくっついたことで、ただの現象が色鮮やかになった瞬間を見た気がした。

講評会で「もう少し内容をギュッとさせてみてはどうか」「建物内を使うというのも面白いかも」という話に広がった時、作者が「観客に行動を強要することをしたくない」というような話をしていたことに私は少し違和感を感じた。観客は自然発生的に沸いて出てきているわけではなく、この場に呼んでいる（宣伝している）時点で予定を開け、電車を乗り継ぎ見に来ている場合だってある。つまり、もうすでに大きな力が働いて集まっているので、その場合はある程度どう見たら一番楽しめるかや作者の意図が一番伝わるコアパターンのようなガイドはあっても良いのではないだろうか。あるいは、ディズニーランドのような「どう居たって楽しめる空間」の提供か。少なくとも私はディズニーを期待しているわけではなく、作者の意思が見たくて駆けつけてる側の観客なので「どう居てもらっても構わない」というスタンスは少し逃げ口上のように感じてしまった。

【合唱】

合唱コンクールというありがちな状況から「個」と「宇宙」というものを行き来するような壮大な哲学を感じさせる作品。普段バラバラな衣服を着ている分目立たなかったそれぞれの身体的個性が着替えるという行為から浮き立って見えた。

私の深読みに過ぎないのだけれど、人間がそれぞれの名の下での人生の役割を終え、宇宙（合唱コンクール）に魂が集合し、また自分に使命（名）を科して再び生まれ出ていくような、そういうドラマを感じてしまった。「名前」や「名付け」にはそれだけ物語を引っ張ってくる力が備わっているんだなあという発見であった。

全員を出演させたいというワンアイデアのシンプルさが、作品のパワフルさに繋がっていたように思う。

【鍋底】

台詞やシチュエーション自体はとても興味深く共感ポイントもきっと沢山あったように思うが、3人で代わる代わる演じるという演出が作品を複雑化してしまったように感じた。男×女というペアリングにこだわらないという劇作家の注釈はあくまでも注釈なのであって、物語の複雑化は不本意だったのではないだろうか。状況を探ることに上演時間の大半を費やしてしまったのが残念だった。

物語を複雑化してしまったのはきっとカップル以外の「あぶれた」人間の扱い方が曖昧であったことに起因すると思う。登場していない人間は舞台上に置かない、或いはストップモーションをさせて自分はその場にはいないと思込ませる、家具などに見立てて遊んでしまう、など曖昧さに逃げない演出を期待したい。

【ラジオ体操を明日、】

短いシーンの連続・オムニバスのような作品。4人の役者がそれぞれ好き勝手やっているようでいて、しかし見ていると4人ともに好感を持ってしまう。作品の雰囲気は可愛く衣装もセンスが良いし、こちらに害がなさそうなので安心感がある。

が、このそれぞれのシーンが最終的にどこへ向かっているのかは見えてこない。その方法で演劇を作るということは多分、観客よりも作り手のストレスが溜まってくるんじゃないかと透けて見えてくる。目的地を決めず、シーンを作って作品を膨らませる方法は作品を豊かにする反面、核がない状態でその方法を盲信すると作家の気持ちが散らかってくるので、特に何人かで一緒に作る時はある程度どこへ向かうかという意志（石）のすり合わせは必要である。あ、石のシーンが特に好きです。

【総評】

『たまびコンペティション』sプログラムは全体的に「やさしい」印象を受けた。作家が全員女性だったからか、あるいは昨今が他者を「尊重」することを重んじる風潮だからか。そのこと自体に良いも悪いもなく、むしろ私自身は風通しの良さを感じるのだけれど、普段感じられないほどのヒリヒリとした強張りや観客の価値観を変える衝撃、作家の嗜好の偏りなども演劇を通じて感じたいなあ、という欲が生まれたコンペでした。皆さんの労作を拝見できて嬉しかったです。有り難うございました。